
ぼくはぱぐ

虎波男女子 三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくはぱぐ

【コード】

N0850D

【作者名】

虎波男子 ミ

【あらすじ】

夏目漱石先生以来動物の目から見た人間社会を描く作品は幾つかありますが、ワンルームマンションにやって来たパグの目から見たお話・・・ということになります。

第1話

あの〜、ぼくはバグではありませんので。

あ！社会的にはバグなのかも・・・（遠い目）。

その日は運命の出会いだったのかな。ゲージの中にいた兄弟が引き取られて行って、ぼくだけが残っていたんだ。

モウモウのおっぱいを飲んでいたら、人の視線を感じたの。

視線は綺麗なお姉さんだった。ではではこちらからもLOVEの視線を送ったら、お姉さんはどこかへいつちゃった。

どうしたんだろう??とおもったら、お姉さんはすぐ帰ってきて携帯用ケージに入れて車に乗せてくれたの。後で聞いたらペットショップの近くの銀行へ行ってお金とか言うものを出してきたんだって。着いたところはお姉さんのおうちなわけね。

ここでも、モウモウのおっぱいをもらった。ペットショップのおっぱいより美味しい。なんでも少しお高いおっぱいなんだそうだけど。でもおねえさんのおっぱいは飲めないのかなあ??話に聞くもうもつのおっぱいの出るところぐらい大きいのに。

おねえさんの家では、本当は犬とか猫と一緒に住めないらしい。

「あんまり吼えちゃだめよ」って釘も刺されてしまった。ぼくたち犬が吼えるって、よほど嬉しいか、よほど警戒しているかなんだよね。ここはお姉さんの手前、おはよう・おやすみ程度の“わん!!”にしておくね。でもお姉さんに危機発生時には吼えまくらなくては。犯人に噛付いてもいいけど、蹴飛ばされたらいやだなあ。

お散歩はまだ歩いてはいないんだ。生まれて一ヶ月でワクチンとかいってお薬を注射してもらっていないから、まだ地面を歩くことは

できないんだって。そのかわりおねえさんが抱いてお散歩に連れて行ってくれるの。お姉さんの胸ってママを思い出すなあ。

ただよく見かけける猫ちゃんたち。ぼくはお友達になりたいのに、猫ちゃんがびっくりして逃げていくんだよね。ねこちゃんは用心深いんだけど、なんか切ないなあ。

とっているうちにお姉さんが寝る時間になってしまったね。脚をぼく用のタオルで拭いてもらって、おねえさんのベッドで待っているの。寝る前にお姉さんにキスしてもらうんだ。そのときとってもいいにおいがするけど、なぜなのかなあ。

お姉さん明日も元気で幸せでいてね。そのためにぼくはおねえさんの家に来たのだから。

第2話

お姉さんの家なんだけど、あんまり広くはないんだ。ぼくがてくてくと歩いてても、端から端までそんなにかからない。といっても4畳半一間ほど狭くないんだよ。いわゆる1DKなんだって。

犬だから1DKを知っているかって??実はぼくのトイレに新聞紙とか広告のチラシを使ってもらっているんだけど。時々家の広告のチラシがあるのよね。それを見て1DKだの3LDKだのの言葉を覚えたんだよ。

お姉さんは一人暮らしだからそのぐらいでいい・・・と思うですよ。お姉さんは衣装持ちだから置く場所に大変なんだって。入りきらないのはどうしているのかなあ??って思ったら、トランクルームに預けているんだって。たまにお姉さんの運転する自動車に乗せてもらうんだけど。お姉さんがお休みの日に、衣類を入れ替えしているんだって。

なぜにお姉さんは衣装がいるのかって??お姉さんはスナックのママさんなんだって。大人の人がお酒をのんだり、お話をしたり、カラオケとやらで歌を歌ったりするんだって。いろんな人がいるよ。うで、帰る前に起立して阪神タイガースの歌(六甲嵐)を激唱するひともいるんだって(ん?)。

時計が16時ごろになったら家を出て、次の日の朝6時になったら帰ってくるお姉さんだけど、だいじょうぶかなあって心配になるんだ。犬とか猫は夜行性ってことで夜起きているのは大丈夫だけど、猿から進化した人間は体中の毛とともに夜行性まで失ってしまったんだって。昼間寝て夜間起きるってことは人間の身体の動きに反することらしいけど、お姉さんのように夜の仕事をしないとイケない立場の人もいるんだよ。

お客さんに楽しんでもらう仕事のお姉さんだけど、時には辛いことがあったのかへべれけに酔って帰ってくるときもあったんだ。玄関でどて〜んと横になってしまって、そのまま寝ちゃったんだよ。服のままで・・・皺になるのにい。ぼくが横になっていたらお姉さんがだっこしてくれるんだけど。お姉さんが寝ているのをぼくがだっこしてベッドに連れて行くことはできないので、お姉さんが目覚めるまで一緒に玄関にいるの。

でも明日は帰ってきたときに、ぼくを抱っこしてね。

第3話

みんなに会えなくてさみしかったよ。

ぼくのおはなしは一旦翻訳して書いているおばさんに伝えられて、おばさんが日本語に変換してmixiとかいうところにUPしているだって。

翻訳しているおばさんは年甲斐もなく、この夏三角ビキニで闊歩したらしいんだけど、今頃になって腰痛で寝込んだり年末調整を忘れていたりと忙しいって言っているんだ。その割にはイビキを書いて寝ていることが多いんだって。まるで『我輩は猫である』の苦沙弥先生のような感じらしい。おばさん。

もっともおばさんが、あちこちに書きまくっているのも原稿が遅くなる原因らしい。

ぼくの話に戻してもらおう。

さてぼくたちのように、お家にて住んでいる犬猫だけでなく、この世に生きている動物はお互いに会話ができるんだ。人間だけはいつのまにや、人間同士でのみ話ができる存在になってしまったんだって。でも乳児の頃と年老いてからは動物との会話ができるんだって。お姉さんが住んでいるマンションと周辺には、動物と話が出る年齢に達した人がいないようなんだ。

逆に人間が言っていることは、しっかり動物は理解しているんだけど。理解しているって行動をとらないだけなんだよ。

お姉さんの日常なんだけど、昼過ぎに起きてからお風呂に入るんだ。そのときぼくも一緒にお風呂に入るの。一緒に湯船につかるんだけど、当然ぼくの背丈じゃ足が着かないから、お姉さんの綺麗な

手で持ってもらおう。ぼくはお風呂好きなんだけどなあ。小さいときから慣れていたからかな。もっとも風呂嫌いの代表格である猫くんも、子猫の時からお風呂に入っていれば、お風呂好きになるんだって。

不安定だけとお姉さんの膝の上に乗って、お姉さんの顔を見るの。・じゃなくてお姉さんのおっぱいを見るの。お湯にぶかぶかと浮かんでいるんだ。おねえさんの肌って白いんだよ。夏に海とかいうお水が沢山あるところへ行っても、すぐに日焼けがもどってしまうんだって。

今日はぼくが先にシャンプーで洗われたの。シャンプーも苦手な犬もいるんだけど、ぼくはそうじゃないらしい。もっとも今はお家の中だけだから汚れることもないんだけどね。

ぼくのシャンプーが済んだら、お姉さんがシャンプーするんだ。ぼくは毛が短いけどお姉さんの髪の毛は長いから、使うシャンプーの量も多くなってしまうんだよね。少し高い目のシャンプーだから時々詰め替え用を買ってきて詰め替えているんだ。そのほうがもったいなくないよね。

ぼくはしっかりとお姉さんの綺麗なヌードを見ているんだけど、文字しかUPできないので読者の皆さんごめんなさいね。

でもお姉さんの脚には擦り傷切り傷のあとがあるんだ。過去に悪事を犯して古傷がある。・・・ってお姉さんじゃないけど、女性が自分の脚で自立するのって大変なんだなあ。・・・って、すこしおませかしら。

お風呂から上がって、バスタオルを巻いたお姉さんにタオルで拭かれて、ドライヤーで乾かしてもらっちゃった。

お風呂の後お姉さんと一緒にご飯。ご飯の後お姉さんはメイクして着替えて・・・そしておでかけ。今日はピンクの下着だったんだけど・・・言わなくてよかったかな（をういをい）。

お姉さんがおでかけ。お出かけのときには抱き上げてキッスしてくれるの。いつてらっしやっしやっし。

でかけるときには小さく「わん・わん」というんだ。あまり大きい声だとご近所に迷惑だものね。

お姉さっくんいつてらっしやい。

今日は酔いつぶれないようにね。いつしよにベッドで寝ようね。

第4話

ぼくの話を書いているおばさんが言うには、非常にメルヘンチックなお話を見つけたので、予定を変更して登場することになったんだって。

お姉さんが夕方前にお出かけして、ぼくがお留守番している間は、何をしているのかって？？ごはんを食べたり、横になったり・・・というのを食っちゃ寝というのか（笑）。

従来犬にはテレビは見えないって言われてきたんだけど、ぼくはしっかりとテレビを見ることが出来るんだ。東京タワーからの放送よりも、アニメ専門の衛星放送のほうが楽しいんだなあ。ぼくの仲間も多数登場していることだし。

夜中でも光って動いているパソコンだけど、さすがにキー操作なことができないので、電源を入れたはいいけど、どのように操作して良いのか、終わらせるのはどうするのか？？わかんないのでそのままにしておいたんだ。

あくる日お姉さんが、画面のスタートという部分をクリックして終了させたけど。終わらすのにスタートって不思議だなあ。

テレビも見ないでうとうととしていたときのことなんだけど、お台所のほうから人が喋るような声が・・・しかも一人じゃないんだ。いつの間にこんな沢山の泥棒が入ったんだろう？？空き巣に入るのに見張りを頼んだら、見張りが喋る奴で「そんなええ仕事あるんや〜」ってことで、我も我もと空き巣に雇用（？）してもらった実例があるけど。この場合でも実行犯は一人だけなんだよね。お姉さんの家はそんなに沢山入ったら床がぬける・・・ことはないだろうけど・・・心配。

静かに台所に足を忍ばせて、椅子によじ登って・・・音を立てないようにするのは大変だよ。椅子に立ってテーブルの上を見ると、ミッキーの人形が楽しそうに踊っていたのでした。

ぼくに気づいたのか、魔法使いのミッキーが近づいてきて「ぱぐみちゃんだね、私たちのダンスパーティーによっこそ」・・・あれ？ぼくの名前どうして知っているの？

「そりゃ私たちは、ぱぐみちゃんが来たときから、知っているよ。ただ人形なので普段は動かないし喋らないけど、見たり聞いたりしちゃんとしているんだよ」

・・・で夜中にダンスパーティーなの？

「人間の目があるからだよ。動かないと思っているものが動いたら、びっくりするだろ」

・・・ふっふん

「よければ、ぱぐみちゃんも踊ないかい??」

・・・おどりたい!!

「じゃ、魔法をかけるね。チチンパイパイハ4ch!!」

気がつくともミッキーと同じ背丈になってテーブルの上にいたんだ。その後踊ったり遊んだりしたんだ。

「どうかね。楽しいかね」モノクロのミッキーが尋ねてきた。

・・・楽しい、ずっくとひとりでお留守番だったから。

「君はいずれ外の空気を吸えるようになるさ。そのときは我々が留守番をすることになるが」

・・・え??、お人形が留守番なんですか??

「そうだよ。留守番をする人形の大きいのは仁王像つてのがあるのさ、もつとも奴が動いたらすごいことになるだろうよ。」

・・・ふっふん。よくわからないけど。

「ここのお姉さんも楽しんでるのよ」ミミーちゃんが言う

・・・え???どうやって???

「お姉さんが落ち込んでるときにはね、魔法をかけて、今のぱぐみちゃんのように小さくなって、一緒に踊ったりしているの」

・・・お姉さんはそんなこと言わないけど。

「現実には私たちと踊っていても、夢の中での出来事と思ってしまっただけね。実際に人間は沢山の夢を見ているんだけど、覚えていないのは一部分だけ。でも脳細胞の中には楽しかったって記憶が刻み込まれているはずなんだからね」

・・・ふ〜んわかんないや。

「でも常にお姉さんを守るのは、ぱぐみちゃんあなただけなのよ。しっかりがんばってね。」

・・・うん。がんばるね。

気がつくともベッドの上だった。確かにミッキーマウスの人形と踊っていたはずなんだけどなあ。

玄関の鍵が開いた・・・お姉さんが帰ってきた。

「ぱぐみちゃん、ただいま。」

・・・わんわん

「あら。このお人形ここにいたかしら??」

見てみるとミミーちゃんがテーブルの上で転がっていた。

第5話

ぼくの話日本語に翻訳しているおばさんが、なにを血迷ったのか“大阪府の粗大ゴミ”の研究をしたり、風邪を引いたり、生理休暇になったり・・・おばさんは孫がいるから閉経しててもおかしくないのになあ（つてをいをいをい）。

おばさんの“大阪府の粗大ゴミ”の研究レポートが、みなこへへえ日記に載っているんだって。暇な人は見てね。

さて、今回はぼくは直接登場しないんだ。おねえさんの職場であるスナックでのお話なので、ぼくはお留守番していたわけなんだ。

飲食業でペットは全面的にNG・・・でもなくて、お姉さんとお店の大阪本店の隣の店では猫のマイケルくんがいたし、ご近所にあつたお好み焼きのお店ではママとこのワンちゃんが具合悪いときは一緒に出勤していたんだって。

おねえさんのお店は新宿にあるんだ。駅を挟んで反対側の居酒屋に猫の家族が住み着いてしまったことがあるけど、これは勝手に入り込んできたから違うのかな。でも招き猫になったのかそれなりに繁盛していたんだって。

・・・と前書きが長くなってしまったけど、これから本文にはいるね。

場所は新宿。マンションの地下1階にあるお姉さんのお店。

「ありがとございまして」おねえさんの澄んだ声が響く。
時計の針は12時前。おねえさんの仕事はまだまだ続く。

「ママ。今日も大忙しかったね。」

さつきまでの満員状態が嘘みたいに静かになってしまった。

お店に残っているのはママと男性客だけ。

「そうね、忙しいのが続いているわね。暇なときは暇だけど本当に景気が回復しているのかしら??」

男性客・・・お姉さんのお店では先生ってよばれているだって。

本当に高校の英語教師なんだそうだけど。

「景気がいい悪いっていうのは、あくまで帳尻合わせしたら数字が
いいだけのことじゃないかな。」

お姉さん微笑んで

「先生たら、また難しい話をするっ」

「景気がどうのこうのよりも、ママの元気は以前にも増しているんじゃないかな。?」

「あら、わかりますう??」

「わかるよ。ここんとこのママを見ていたらね。」

「でも、本当は逆の場合でも辛さを見せられないのがこの商売です
ものね。」

先生、水割りを飲んで。

「それだけママが正直なんだよね。今の子供よりも素直かもしれないよ。」

「うれしい!!なんならお店のお酒全部呑む??」

「呑めないこと無いけど、鮭は・・・じゃない裂けでもなく、
酒は適度がよるしい。どんないいことがあったのかな?宝くじがあ
たったとか」

「100円ならあたるけど」

「ありや違った。それなら新しいランジェリーを買ったとか」

「先生のエッチ。ちがうよお。」

「それなら、好きな人が出来たとか??」

「あら、この店に来られる人がみくくんな好きな人よ」

「うくくん、みごとにかわされたな。わからないなあ」

お姉さん、微笑んで。

「実はね、あたらしい家族ができたの」

先生噴出して（ふきだして）

「ママ一人身でしょ??いつ出産したの??」

「何勘違いしているのよ、ワンちゃんと住んでいるの」

「ワンちゃん・・・犬ね。なるほど」

「ぱぐの生後1カ月の子なのよね。そろそろ予防接種してもらわないとね。」

先生今度はウーロン茶を飲んで

「そうだね、狂犬病は日本では発症事例無いけど、外国では無いことが無いからね。」

「あらそうなの」

「アジア方面へ旅行していた友人が噛まれたんだけど、念のため・・・ってことでワクチンと抗生物質をうってもらったんだけど、抗生物質が良く効き過ぎて1日寝込んでしまったんだって。」

「あら犬に噛まれるよりも、薬のほうが怖いようね。」

「1日寝たら元気になった>友人。しばらくは狂犬病の犬に噛まれても免疫が出来ているって自慢していたね。奴の履いていたジーンズを見せてもらったけど、見事に大きな穴が開いていた。なんでも記念においておもしろい。」

「こわいねえ」

「もっと怖いのは、室内犬だからって予防接種しないことかな。人間にも犬にもどちらも辛いと思うよ。」

「近々獣医さんとこへいくね」

「で、ワンちゃんの名前はなんと言っのかな」

「ぱぐ美ちゃんっていうの」

「女の子かな??」

「うっん男の子」

「人間でも男でも女でも通じる名前の人がいるものね。たとえば亀井静香・・・って名前の人もいるものね。」

「大事な家族なの>ぱぐ美ちゃん」

．．．って話をしているのをぼくがなぜ知っているか???.?
それはないしよ。

第6話

ぼくの話を書いているおばさんの家なんだけど、夜中に“ぱく”
ん”という破裂音がしたんだって。おばさんそこには電氣的に破裂・
・コンデンサーの爆発を起こす品物を沢山使っているけど、幾ら
探しても破裂音の元がわからなかったんだって。おばさんもあきら
めて、明日まで生きていれば大丈夫だろうってことで、呑気にグウ
グウと寝たんだって。

おばさんのおうちもおばさんも無事だったけど、このぐらい根性
が座っていないとぼくの話をかけないのかな??と思ったら、非常
に怖がりなんだそうです>おばさん。

お姉さんはお店が終わってから、お店の近所のレストランで朝ご
はんを食べてから帰ってくるんだ。もっとも新宿という町は聞くと
ころによると、一つのお店が終わって、別のお店へ行って、そのお
店が終わってからお店の人と一緒に、別のお店へ行って・・・をか
なり繰り返し返せるらしい。というか朝からお酒がのめるんだなあ。も
っとも吉野家も24時間アルコールを扱っているけどねえ。

新宿を6時台の電車に乗って、お姉さんはお家に帰ってきて、ぼ
くのごはんを出してくれて、シャワーを浴びて、それからベッドで
スウスウとねるわけなんだ。いつもはベッドと一緒に寝るんだけど、
今日はお姉さんはお疲れみたいなので、椅子の上によじ登って寝る
ことにしたの。

今日のお姉さんのナイティはピンクのベビードール。スレンダー
な身体にホルスタインのようなおっぱいがついているの。
ベビードールのすそからは細く長く白い脚が延びているの。

いつしか時間も過ぎて気がつく・・・部屋の中に男の人がい

る。それも強盗といわれる職業の人らしい。吼えてお姉さんを起こさないといけないのに、声も出ないし身体が動かないよお。どうしたんだろ??? こういうときこそお姉さんを助けないといけないのにい。

お姉さんも強盗に気づき、

「きや~~~~~あ!!!」

強盗が低い声で……って大抵強盗の人は低い声で話すんだけどねえ。

「静香に品……じゃない静かにしな!」

お姉さんが泣きながら

「お金ならないわよ……助けて!!!」

強盗がにやりとしながら

「初めは金のつもりだったが、こんな上玉にお目にかかつちゃ犯さざるおえねえな」

お姉さんさらに泣きながら

「やめて!!!おねがい!!!やめて!!!」

強盗はお姉さんの口をガムテープでふさぎ、手首をロープで縛ってお姉さんのピンクのパンティを切り裂いて……

「きれいな身体だな。吸い込まれそうになるぜ!!!。」
と言って、自分のズボンを脱いでおちんちん丸出しの格好になったんだ。

あ~~~~ん、どうしたらいいんだあ。このままじゃお姉さんがやられちゃうよお。もう一回力を込めてジャンプ……ベッドまで届かなかった。

いた~~~~い。

床に落ちてしまった。

気がつくとも強盗もお姉さんもない。

ガシャガシャと玄関のドアが開くと、お姉さんが帰ってきた。思わずぼくはお姉さんの脚に駆け寄った。

「ぱぐみちゃんどうしたの??怖い夢でもみていたの??」

そうか、強盗のことは夢だったのか。でもあんなに怖い夢をみたのかな??

「あら??TVが映りっぱなしだったわ」

衛星放送のAVチャンネルのレイプ物が流れていたのだった。

中書き

たまたま可愛らしいぱぐちゃんをペットショップで見かけた女性のmixi日記から、自宅で餵えなきゃWeb上でバーチャルで・
・と思つて書き出したのが“ぱくはぱぐ”なんです。

まだ予防接種を受けていませんが、そろそろ予防接種を受けてお外の風景をばぐみちゃんの目から描かないと思つています。

しかし、私は猫を飼つたことはあるけど、小型犬は飼つていないんです。仕方ないのでインターネット上で情報収集して、研究を重ねて無茶な設定にならないようにしながら文章を考えてきました。

(その5)で犬に噛まれた人の話が出ましたが、これはmixiで狂犬病のニュースへの書き込みの中で、ご自身が外国で犬に噛まれた方のお話を参考にしました。でも相当痛かつたんでしょうね。ジーンズに大きな穴ができたのは本当で、ご自身が記念品として保管されているとのことですよ。

1回当たり原稿用紙で3〜4枚書いています。私としては一度に書けるのはその程度なんですよ。それ以上書けと言われましても、ハングアップしてしまいそうな気がします。

しかも2〜3日に1回程度でしょうか。そうでないと書くのが辛い・・・の領域に突入してしまいます。作家と言われる方はもっと沢山書かれるんですよ。

4コママンガが4〜5本並んだ連載ぐらいの文字数を目標に書いているんですが、あまり上手ではない私の文章を延々と続けられては読むほうも大変ではないかなと言つ気がします。

今後の展開ですが余り長期連載(?)にはならないものの、最終

話では波乱万丈の展開にすることにしました。

とりあえずな中書き・・・というところで。

第7話

みなさ〜ん、おげんき〜ん???

ってなんか、ぼくの文章を書いているおばさんが、メールを書き出すときに書く文章みたいになってしまいました。なぜに遅くなったのかは、おばさんによると年末は忙しいからなんだそうです。ぼくが見ている分には、おばさんは忙しくなくて時々キーボードうつ伏せになって寝ていることが多いんだけどね。・・・というとおばさんが気を悪くするのでこころへんにしておくね。

さて、長期連載になっているんだけど、以外に物語の中の時間の進行は・・・そんなに早くはないだよ。ぼくはまだ生後3ヶ月を過ぎたぐらいなんだ(本当は1ヶ月つて書いてしまいました)。これはぼくの文章を書くおばさんがゆっくり書いているからなんだよね。あまり早く書け・・・というとおばさんが暴走して故障する恐れがあるので、無理は出来ないらしいんだ。

今日は獣医さんところへお姉さんと一緒に行くことになったんだ。なんでも予防接種とかいうのを受けないといけないらしい。注射針を刺されるのは痛そうだなあ・・・と思っているうちに、お姉さんの運転する自動車は獣医さんところへついたんだ。

獣医さんの中は・・・そんなに居心地悪くはないなあ。犬と猫を飼っている人つて沢山いるんだねえ。お姉さんのお隣に座ったおばさんは猫ちゃんを連れていた。実は犬と猫は人間には聞こえない音波で会話をすることができるんだ。

「ぼつや、はじめてなの??」猫ちゃんが聞いてきた。

「うん、そうだけど」

「今日は予防接種なんだって」・・・つて言うと、

「あたしはね、なんでも糖尿病なんだって。身体は大事にしないといけないわよ」

「でもお姉さんとっても綺麗なのに」・・・って聞くと。

猫ちゃんは笑って。

「綺麗に見える??嬉しいわ」

「あたし元男なのよ。タマタマとおちんちんを切り取ってもらったの」

「????????」

「つまり、子供が出来ないようにするのよね」

「へ〜そうなの」・・・ぼくが答えると。

「あたしの飼い主さんも、実は元男なのよ。これは内緒ね」

猫ちゃんの飼い主さんを見たら、加賀まり子というか松田聖子と
いうかとても綺麗な女の人なんだけど・・・よくわかんないや。

どういうわけかワンちゃんを連れて人が沢山診察室に入っていくんだ。さっきの猫ちゃんが言うには

「さっきね大怪我した犬ちゃんが運び込まれたの、人間はA・B・O・B・Aの血液型つてものがあつて、輸血できる血液が決まっているんだけど、犬はそうでもないから大怪我で血液が足りなくなつたときには、ご近所の犬ちゃんを動員して血液を輸血するんだって。」

そんなこともあるんだなあ。

「怪我した犬ちゃんも、ここに来て怖がって逃げ出して、居合わせ
た人がみんなで説得して帰ろうとしたときに車にはねられたたのよ
ね。はじめからおとなしく診察を受ければいいのに」

・・・気の毒な話だなあ。

「あなたも痛かったら声を出してもいいのよ。痛がらないと人間の
医者にはあなたの痛みはわからないんだから」

・・・うん、そうするよ。

とか言っている間にぼくの番がきた。

ぼくの前の猫ちゃんも注射だったけど、そんなに表情を変えることなく香箱すわりしていた。

獣医さんは若い女の人だった。

「ぱぐ美ちゃんっていうんですね。ぱぐ美ちゃん暴れちゃだめですよ」

お尻に注射針が刺さって・・・、あれ??ぼくの手を誰かが持つていてくれる。注射している間お姉さんが手を持っていてくれたのだ。お姉さんありがとう。

獣医さんがお姉さんに

「星野さん、ぱぐ美ちゃんにご苗字がないですから、星野ぱぐ美とかいておきますね。」

お姉さんも了承したらしい。

ぼくの名前は“星野ぱぐ美”なんだって。

後日お姉さんが保健所に行って、ぼく“星野ぱぐ美”を登録してくれたんだ。登録番号は8322なんだって。でも登録番号8322
2 星野ぱぐ美って名刺を出すわけでもないけどね。

中書き(その2)

全国の“ぼくはばぐ”ファンの皆さんこんばんわ。

ストールをじゃないストーリーを書いているおばさんでございませ。できたらお姉さんって言って欲しかったな。ばぐ美。

2006年の12月30日の14:39に“ぼくはばぐ(その7)”をmixiにUPして以来お休みしていましたが、そろそろ再開しないとばぐ美ちゃんに怒られますので、そろそろ再開することにしますね。別に夜逃げしたわけでもありませんので念のため・・・って夜逃げしたらネットにアクセスは・・・できるのね(笑)。まあアクセスすることに100円程度・・・と思ったらネットカフェにて寝泊りされている方もいるんですね。

・・・と言っても第11話が第一部のエンディングになるわけです、本当は10話で打ち切りにしようとおもっていたんですが、この話を書くので・・・あることに気づきまして近々関係省庁に問い合わせすることになりました。あ！今はネットで調べられるのか(笑)。関係省庁と言っても、どういうわけか代表電話番号すら探しにくいWebの省庁もあります。つくってあげばいいや、104(NTTの番号案内)で調べる奴は調べるだろう・・・といったところですけど、104(NTTの番号案内)で調べるのも10円単位のお金がいるんですけどねえ。

さて第2部の基本構想もあるんです。これは時空を超えてのお話&エロチックなお話になりそうです。エロチックと書くとき非常に喜ばれる方もおられますけどね。

今しばらくお待ちくださいね・・・って待たせすぎやがな。

追伸：しかし中書きって書くのは、北壮夫先生と私だけかなあ

第8話

みなさ〜ん、げんきですかあ??
ぱぐみで〜す。

作者が地獄の広報担当になったらいいので、ぼくの話を書いてくれないあいだに、ぼくも一回り大きくなってしまいました。

世間一般では和尚が2・・・ではなくお正月ってことで、実にめでたい日なんだって。そういえばTVの番組が通常のリアルタイムのニュースが減って、どう見ても録画だろ・・・が増えているものね。

ボクも2歳、今年はおねえさんが雑煮をご馳走してくれたんだ。
おねえさんは年末に仕入れた黒系のミニスカート&ストッキング&赤いガーターのいでたちなんだけど、おねえさんほどの美人なら和服も似合うのよね。この作品を書いているおばさんは夏になると、浴衣で闊歩しているけど・・・作者のおばさんは、浴衣に「武蔵川部屋」とか「高砂部屋」って文字が入っている浴衣のほうが似合うらしい。

で、今年は初めて雑煮なるものをいただきました・・・黄色っぽい味のあるお水の中に、白っぽいお餅がはいっているんだよね。
丸ごとかじると・・・う〜〜息ができなひ・・・。夏目漱石先生の我輩猫の場合耳を立てたり尻尾を振ったりして、餅を口から取るうと奮闘努力したんだけど、結局は家人にもちをとってもらったんだよね。

「あら、ぱぐみちゃん。お餅はたべにくかったかな??」ってお

ねえさんがお餅を小さな寸法・・・マーブルチョコレートぐらいのサイズにちぎってくれました。これでほかもお餅のおいしさがわかりました。

あんまり大きなものをばく!!と食べると、どこその農業協同組合のCMのように顎が外れてしまうので・・・そんなことはしないけどね。

という事で、本年もよろしく願います。

中書き(その3)

64日以上更新していないと・・・64日以上更新していませんというメッセージをいただきました。だって、あたしにも都合があるのよお。

てなわけで今日は中書きということぞ。

隊長~~~~。

「わしは隊長ではない、総統であり書記長であり管理人であるが。

あの~~~~、総統であり書記長であり管理人の人は一応女性かと・

「そうであった。だったらどうなのよ。」

重大なことに気付きました・・・

「あら、何がおきたの??説明おっしやい??」

次の展開にするための設定ですが、ぱぐ美ちゃんの体格では難しいかと。

「だって、あたしもパグを飼っていないのよお。多分こんなもんじゃないかと書いているんだから。」

え???そんなものでいいんですか???

「おほほほほ、女王様とお呼び（ぱしぱし）。」

ひえ〜〜、みなご女王様……って、まだその時間じゃないですよ。

「じゃ、もつと遅くなったら可愛がってあげるわね。」

あ〜〜ん、女王様あ。

「で、何が望みじゃ。」

みなごさまの、女の印を見たくございます。

「お前には見せん！！、見たければあわびでも見とけ！！」

でも、みなごさまのは松茸かも???

「そういつことを言うお前は、しばき！！！！！！！！！！」

ひえ〜〜〜、でも中書きになっていませんが。

「そうですわね。ぱぐ美ちゃんの件ね。」

そうなんですよあ、そうじゃないと話がすすみませぬ。

「本当はね、展開……するはずだったんだけど。1歳〜2歳のぱぐ美ちゃんでは体格的に話が展開しないのよ。」

ほ〜〜〜。


~~~~~ほとんど漫才やなあ。~~~~~

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0850d/>

---

ぼくはぱぐ

2010年10月21日21時03分発行